

有明海水産資源回復技術確立事業*

サルボウ種苗放流・追跡調査

森川 太郎 川名 拓里

有明海佐賀県海域におけるサルボウ漁は、ノリ養殖区画漁業権漁場とほぼ重なる漁場で、ノリ養殖の副業として春季から夏季に行われる重要な漁業である¹⁾。

佐賀県におけるサルボウの漁獲量は、平成に入って1万トン以上であったが、平成10年以降は豊凶を繰り返しながらも一定の漁獲量を維持していた。しかしながら、近年は梅雨時期に発生する豪雨の影響により海域が低塩分化することから、令和3年度漁期は、一部の地区のみの漁獲、令和4～6年度漁期は、県全域で休漁になるまで資源量が激減している。

この状況を受け、昨年度からは、有明海水産資源回復技術確立事業を活用し、サルボウ稚貝の200万個の放流を実施した。本報では、今年度実施した放流の概要とその後の追跡調査の結果を報告する。

方 法

今年度の放流は、2024年11月及び12月に地点A（七浦沖合）、2024年11月に地点B（カキ礁）で実施した（図1）。放流に用いた稚貝は、公益社団法人佐賀県玄海栽培漁業協会、佐賀県有明水産振興センター及び佐賀県有明海漁協大浦支所で生産されたもの（以下、「県内生産個体」と）、(株)二枚貝養殖研究所（長崎県佐世保市、以下「二枚貝研究所」）で生産されたものを100万個ずつの計200万個用いる予定であった。しかしながら、県内生産個体がへい死や流出により100万個に届かなかったため、170万個を二枚貝研究所から入手し、合計218.1万個を放流に用いた（平均殻長約10mm）。

追跡調査のため食害・散逸対策として、地点Aについては、一部個体をカゴとネットに収容し、付近のカキ養殖施設に設置した（図2）。また、地点Bについては、一部個体をカキ礁に設置した丸カゴに収容した（図3）。

追跡調査は、月に1回程度、殻長及び生残率の測定を行った。

また、令和5年度に放流したサルボウについても、今年度放流群と同様にカゴ等に収容し、追跡調査を実施した。

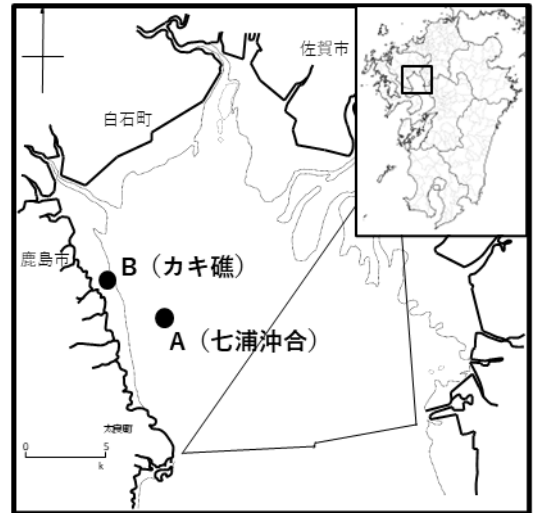


図1 放流地点図



図2 地点Aの追跡調査用カゴ



図3 地点Bの追跡調査用丸カゴ

*国補助事業名：有明海漁業振興技術開発事業

結 果

令和5年度に放流したサルボウの各地点の生残率及び平均殻長の推移について、図4, 5にそれぞれ示した。サルボウ稚貝の生残率は、地点Aでは2025年3月時点で78%、地点Bでは2%となった。平均殻長は、地点Aで36.3mm、地点Bで29.5mmで推移した。地点Aでは大きな減耗はなく、成長も良好であったものの、地点Bでは夏季に大量減耗がみられた。10月以降は斃死も少なく、成長も良好であった。



図6 地点Bの改良版調査用コンテナ

文 献

- 1) 真崎邦彦・小野原隆幸(2003): 有明海湾奥部におけるサルボウ漁獲実態と分布状況. 佐有水研報, (21), 29-36.

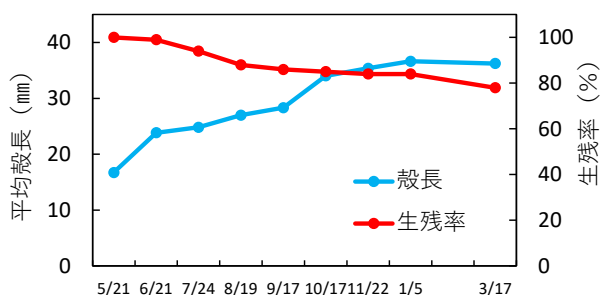


図4 地点Aにおける生残率及び平均殻長の推移

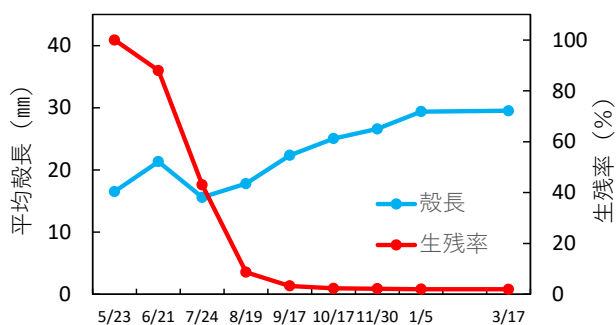


図5 地点Bにおける生残率及び平均殻長の推移

令和6年度に放流したサルボウは、放流1カ月後の調査時には丸カゴの中の稚貝の確認が非常に困難で、以降の追跡に支障があると判断された。そのため、令和7年3月の調査時に新たな手法としてコンテナ式へ変更し（図6）、追跡調査を再度開始した。